

中国社会文化学会 2025年度大会

会場：東京大学文学部1番・2番大教室（法文2号館2階）

主催：中国社会科学学会 Tel:03-5841-3746, 大会専用E-mail:shabun.taikai@gmail.com

参加費（シンポジウム資料代）1,000円

2025年7月5日（土）自由論題研究報告

第Ⅰ会場：13:00～15:30 1番大教室

司会：伊東 貴之（国際日本文化研究センター）

『尚書』における天命の変容——出土文献との比較を通じて……………金 スマロ（東京大学大学院生）

コメンテーター：近藤 浩之（北海道大学）

合理主義的鬼神と世俗倫理——朱有燉作品における鬼神イメージをめぐって——

……………温 彬（大阪大学）

コメンテーター：上原 究一（東京大学）

明清江南における武科挙受験活動の展開——山陰張川胡氏と呉江黎里汝氏を中心に——

……………大杉 耀歩（慶應義塾大学大学院生）

コメンテーター：岸本 美緒（公益財団法人東洋文庫）

第Ⅱ会場：13:00～15:30 2番大教室

司会：川島 真（東京大学）

清末国学と国家語制定：銭玄同にみる学術・思想の変遷……………中島 大知（京都大学大学院生）

コメンテーター：吉澤誠一郎（東京大学）

魯迅『彷徨』における《雑音》と乱雑な場

……………黄 嘉慶（東京大学大学院生）

コメンテーター：王 欽（東京大学）

「戦後」における精神的再造：ヴァレリー「精神の危機」の日中翻訳と受容の旅（1920-1940）

……………黄 詩琦（中山大学中国語文学系PD）

コメンテーター：塚本 昌則（東京大学）

会員総会：16:00～16:30 1番大教室

2025年7月6日（日）

シンポジウム 中国碑文の社会と文化

共催：科研費基盤研究（C）「初期碑文慣行を通じてみる中国古代の社会結合の特徴に関する研究」

（研究代表者：佐川英治）

1番大教室 10:00～16:30

司会・趣旨説明：佐川 英治（東京大学）

午前の部：10:00～12:00

東漢馮緄碑與宕渠地方

……………薛 夢瀟（武漢大学）

五世紀雲南の社会と漢字碑文——「爨龍顔碑」を中心に——

……………新津健一郎（信州大学）

午後の部：13:00～15:45

モンゴリアの突厥文字碑文における縦書き書式の形成と展開

……………齊藤 茂雄（帝京大学）

碑に系譜を刻み、保存し、再解釈する——華北における祖先伝承の変遷と碑刻——

……………飯山 知保（早稲田大学）

碑に込められた時間——重刻碑に見る水利秩序の再生の「時」——

……………井黒 忍（大谷大学）

碑に刻まれた権威——多言語碑刻が示すモンゴル帝国の表象——

……………舩田 善之（広島大学）

総合討論：15:45～16:30

* 中国語報告は日本語通訳あり

◆自由論題研究報告 7月5日（土）第Ⅰ会場：13:00～15:30 1番大教室

◇『尚書』における天命の変容——出土文献との比較を通じて

金 スマロ

〔報告要旨〕本発表の目的は、『尚書』における天命観の変容を、いわゆる『尚書』類の出土文献と現行本の比較を通じて明らかにするものである。とりわけ、『清華大学蔵戦国竹簡』に収録された『傳說之命』に見られる、夢を媒介とした天命授与の描写や、現行本『金縢』篇と戦国時代の版本との比較分析を通じて、現行本『尚書』における天命観が、実際には戦国時代以降の政治的・思想的意図に基づき再構成された可能性を検討する。このような検討を通じて、文献の伝来過程において加えられた思想的編集や再解釈の動態を明らかにし、戦国時代における天命論が、現行本に見られるような体系的・一元的な構造ではなく、より柔軟かつ多元的な様相を呈していたことを浮き彫りにしている。

〔報告者紹介〕金スマロ（きむ・すまろ）、1987年生。専攻は古代中国思想。現在、東京大学大学院人文社会系博士課程在学。主要論文「黄老学における「命」論の探求—『古佚書』四篇と『鶡冠子』を中心として—」（『中国哲学研究』34号、2025年）など。

◇合理主義的鬼神と世俗倫理——朱有燉作品における鬼神イメージをめぐる——

温 彬

〔報告要旨〕本報告は、明初の劇作家朱有燉（1379～1439）の作品における鬼神イメージを取り上げ、その合理主義的改造と倫理的機能について考察する。朱有燉は朱子学の「気による鬼神解釈」に基づき、鬼神を人格的存在ではなく陰陽二気の作用として描き、勸善機能を合理的に再構築した。その結果、福報は信仰ではなく日常倫理の実践によって得られるとされる。この特徴は『福祿寿仙官慶会』や『群仙慶寿蟠桃会』などに顕著である。とりわけ後者では宗教的倫理が排除され、世俗倫理のみが強調されている点が注目される。本報告は、朱有燉の作品を通じて、儒教的鬼神観が演劇という媒介を通じて民間信仰に働きかけた一形態を明らかにし、儒教と民間宗教の関係を論じるうえで演劇を含む文芸の意義を再考する視座を提示するものである。

〔報告者紹介〕温彬（おん・びん）、1993年生。専攻は東アジア伝統演劇論。北京中央戲劇学院戲劇文学系、大阪大学文学研究科演劇学専攻博士前・後期卒。主要論文『朱有燉の「恋愛劇」の教化意味—戯曲『復落娼』『香囊怨』『団円夢』を手掛かりに—』（『フィロカリア』41、2024年）『朱有燉の朱子学受容—周王府における江西の儒者グループを中心に—』（『待兼山論叢（芸術篇）』58、2025年）など。

◇明清江南における武科挙受験活動の展開——山陰張川胡氏と呉江黎里汝氏を中心に——

大杉 耀歩

〔報告要旨〕明清代に実施された武官採用試験である武科挙は、従来、文官採用試験の文科挙と比べて関心が薄かったものの、近年は制度史分野での進展が認められる。その一方、受験者や合格者本人に焦点を当てた研究はなお乏しく、彼らの受験目的、社会、親族内での立場や役割は必ずしも明らかでない。また、武科挙合格者の出身地や受験熟は北方において顕著であったとの指摘もあり、文風が盛んな江南地域が研究対象となることは少なかった。そこで本報告は、一族から複数の武生員や武科挙合格者を輩出した胡氏（浙江省紹興府山陰県）と汝氏（江蘇省蘇州府呉江県）という二つの宗族を取りあげ、明代後半から清代前半にかけての江南の宗族内において、どのような武科挙受験活動が展開されたのかを明らかにする。族譜や地方志などを利用して受

験動機や一族内における武科举合格の連続性、文科举の受験活動とのかかわりを示し、江南地域における武科举の位置づけを考察する。

〔報告者紹介〕大杉耀歩（おおすぎ・あきほ）、1998 年生。専攻は明清社会史、科举制度史。青山学院大学文学部卒。現在慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程在学。

◆自由論題研究報告 7 月 5 日（土）第Ⅱ会場：13:00～15:30 2 番大教室

◇清末国学と国家語制定：銭玄同にみる学術・思想の変遷

中島 大知

〔報告要旨〕本報告は、清末から五四直前までの銭玄同のことばに関する復古主義的な思想・学術が実践を通して変化した過程を分析するものである。これまで中国語の近代化は書きことばや文字のオーラリティが向上した過程として描かれてきたため、清末国学の泰斗で、五四の白話文運動に反対した章炳麟の思想や学術はあまり重視されてこなかった。だが、章炳麟の弟子たちは中国語の近代化に大きな貢献があったことは、周作人の強調するところである。そこで本報告は、清末国学をめぐる言語思想・学術の近代性を歴史的に位置づけるべく、章炳麟の弟子のなかでも比較的豊富な日記史料を残す銭玄同の思想や学術の変遷を復元する。変化の指標として『説文解字』の扱いに注目し、変化の要因として厳密性と実現可能性とを同時に求めた銭玄同思想の限界、同時代知識界における今文学・古文学の対立、及び日本留学から帰国後の教育経験と政治情勢がもたらした心理的影響を想定する。

〔報告者紹介〕中島大知（なかしま・たいち）、1999 年生。専門分野は近現代中国の思想史・学術史。主に言語に関する思想・学術に注目して研究を行っている。現在、京都大学大学院教育支援機構奨励研究員として同大学院文学研究科博士後期課程に在籍中。

◇魯迅『彷徨』における《雑音》と乱雑な場

黄 嘉慶

〔報告要旨〕従来の研究には、『彷徨』を魯迅の思想や芸術手法、あるいはそのコンテクストへと即座に還元しようとする傾向が見られる。しかし、そのような視点では、テキスト自体が持つ不透明な部分が軽視されがちである。本研究では、魯迅の思想体系に直接結びつかない、一種の《雑音》としての要素に着目し、登場人物と彼らを取り巻く場との関係を分析することを目的とする。具体的には、まず「幸福な家庭」「長明灯」を取り上げ、《雑音》が現れる箇所を特定し、その特徴を明らかにする。次に、「祝福」「石鱸」などを分析対象とし、《雑音》と登場人物の主体性の関係を考察する。さらに、「さらし刑」「離婚」「高先生」などを取り上げ、《雑音》と場の関係について分析を深める。最後に、魯迅がこの《雑音》にどのように向き合い、対処しようとしたのかを検討する。

〔報告者紹介〕黄 嘉慶（こう・かけい）、1994 年生。専攻は中国近代文学、魯迅研究、章炳麟研究。現在東京大学人文社会系研究科博士課程在学。主要論文「眉間尺の母—魯迅『鑄劍』における復讐—」（『中国—社会と文化』、第 39 号）、「章太炎早期札記中の「西学」問題」（『現代中文学刊』、2022 年第 2 期）など。

◇「戦後」における精神的再造：ヴァレリー「精神の危機」の日中翻訳と受容の旅（1920-1940） 黄 詩琦

〔報告要旨〕 フランスの詩人・批評家ポール・ヴァレリーの「精神の危機」は、第一次世界大戦後のヨーロッパ思想界における西洋文明への批判的再考の中で生まれたものである。ヴァレリーが提起した「精神の危機」という命題は、西洋文明の核心に対する省察へと読者を導き、古代ギリシャに端を発する人類の知的伝統が近代において喪失されつつあることを指摘するものである。一方で、この論考は西洋中心主義的視座を色濃く反映している点も看過できない。中国と日本における「精神の危機」の受容は、第一次世界大戦後のヨーロッパ近代文明に対する批判と密接に関わっており、ヴァレリーの文章が有する「世界性」を示している。しかしながら、その受容の様相は両国において必ずしも一致していなかった。本研究は、ヴァレリーの論考が日中両国において翻訳・受容された過程を考察し、両国の知識人に共通する「戦後」の精神的風景、すなわち西洋文明に対する反省という主題を明らかにする。さらに、この反省が翻訳や各地域の言説的枠組みの影響を受けることで、日中それぞれに異なる形で展開され、各国の思想界に異なる影響を及ぼしたことについて検討する。

〔報告者紹介〕 黄詩琦（こう・しき）、1992年生。専攻は中国文学。2023年京都大学文学研究科中国語学中国文学専攻博士後期課程終了、博士（文学）。日本学術振興会特別研究員 DC2 を経て、現在中山大学中国語言文学系 PD。主要論文「吳宓と「文」の新理想：その言語・文体観と二〇世紀初期欧米の言語文化」（『日本中国学会報』第 75 冊、2023 年）、「吳宓のヴァレリー受容と一九二〇年代アメリカ：モダン観と詩の韻律観の選擇をめぐって」（『中国文学報』第 96 冊、2022 年）など。

シンポジウム 中国碑文の社会と文化

2025年7月6日(日) 10:00~16:30 1 番大教室

企画の趣旨

碑は強い発信力をもったメディアであり、中国には古代から碑を好む文化があった。碑についての研究も多く、歴史資料や書道芸術としての碑文研究にはすでに膨大な蓄積がある。しかし、碑がもつモニュメント性やその背後にある社会の特質に迫ろうとする研究は、近年ようやく盛んになり始めたところである。特殊なメディアである碑の流行は、単純な文字のリテラシーや通信・行政の拡大によらず、それぞれの時代や地域がもつ独特の社会習慣を背景として生みだされた。そうした社会習慣に迫ることで立碑を流行させた社会の特質を明らかにすることができる。本シンポジウムでは碑文慣行が生まれ、社会に定着し始める古代から中世の碑文に焦点を当て、その背後にある社会の特質に迫る。

報告要旨

東漢馮緄碑與宕渠地方 薛夢瀟（武汉大学）

東漢名將馮緄是巴郡宕渠人。『漢故車騎將軍馮公之碑』是親友為馮緄所立墓碑，今已不存，碑銘見錄於《隸釋》等文獻。馮緄之父煥，神道闕現存于四川省渠縣土溪鄉趙家村，東漢時屬宕渠縣。此處當是馮氏家族墓地，馮緄碑應距馮煥闕不遠。據《後漢書》與碑文，馮緄歷任蜀郡廣都長、犍為武陽令、廣漢別駕治中從事、廣漢屬國都尉等益州部及郡縣長吏。馮氏當為宕渠地方豪族。延熹五年，朝廷拜緄車騎將軍，南征長沙、零陵、武陵蠻。馮緄所率軍隊，除漢廷兵力之外，還有巴郡板楯蠻。可見，馮緄所代表的地方豪族勢力，與鄉土蠻夷勢力之間關係匪淺。板楯蠻亦稱「賁人」，分佈于渝水、渠水左右。宕渠是其主要聚居地，《華陽國志》稱之為「賁城」。賁人在漢王朝開國故事中扮演重要角色，在兩漢時期，是西南地區華夏化程度較高的「熟蠻」「善蠻」。結合出土簡牘、城壩遺址考古發現及中古地理文獻，馮緄碑背後後的個人史、家族史，折射出宕渠由「宕渠道」至「宕渠縣」、由「賁人城」至「車騎城」的文化景觀變遷。

後漢の名將馮緄は巴郡宕渠の出身である。『漢故車騎將軍馮公之碑』は彼の親友たちによって建立された墓碑であるが、現存しておらず、その碑文は『隸釈』などの文獻に記録されている。馮緄の父である馮煥の神道闕は、四川省渠縣土溪鄉趙家村に現存しており、後漢時代には宕渠縣に属していた。この地は馮氏一族の墓地と考えられ、馮緄の碑も馮煥の闕から遠くない場所にあったと考えられる。馮緄は蜀郡広都長、犍為武陽令、広漢別駕・治中從事、広漢属国都尉など、益州部および郡県 of 地方官を歴任しており、馮氏一族は宕渠地域の地方豪族であったと考えられる。延熹五年（162）、朝廷は馮緄を車騎將軍に任命し、長沙・零陵・武陵の蛮夷討伐を命じた。馮緄が率いた軍には巴郡の板楯蛮も含まれていた。馮緄に代表される地方豪族勢力と郷土の「蛮夷」勢力との間には深い関係が存在していたことが窺える。板楯蛮はまた「賁人」とも呼ばれ、渝水・渠水流域に分布しており、その主要な居住地は宕渠であった。『華陽国志』は宕渠を「賁城」と称している。賁人は漢王朝建国の故事において重要な役割を果たし、前漢・後漢を通じて、華夏化の程度が比較的高い西南地域の「熟蛮」「善蛮」として知られていた。近年の出土簡牘や城壩遺跡の考古学的発見、ならびに中古期の地理文獻を併せて考察することで、馮緄碑の背後には、馮緄個人の伝記や家族の歴史のみならず、宕渠が「宕渠道」から「宕渠縣」へ、また「賁人の城」から「車騎城」へと変貌を遂げる文化景觀の変遷過程を映し出せると考える。

五世紀雲南の社会と漢字碑文——「爨龍顏碑」を中心に——

新津健一郎（信州大学）

碑文の制作という行為は、漢字圏の周縁部に位置する社会ではいかなる意味を持ったのだろうか。本報告では、こうした問題意識から雲南省所在「爨龍顏碑」を検討する。雲南では、前漢武帝期の郡県設置以後、漢字碑刻が散見するようになる。さらに晋代以降には、現地の有力者が残した碑が複数知られる。南朝宋「爨龍顏碑」（5世紀）もその一つであり、従来書道史や民族史といった観点から注目されてきた。だが近年の研究により、南朝宋の雲南に対する統治政策が立碑の一因となったことが指摘されている。碑文（テキスト）を精読すると、記述内容にもそれに符合する内容が見出される。また「爨龍顏碑」所在地周辺には、漢系墓葬や関連碑刻も散在する。石碑の文脈（コンテキスト）もまた制作背景や社会的機能を検討する手掛かりとなろう。これらの点に注目して政治・社会史的分析を行うことにより、中国における「碑文慣行」の一端の解明を試みる。

モンゴリアの突厥文字碑文における縦書き書式の形成と展開

齊藤茂雄（帝京大学）

本報告では、8世紀のモンゴル高原でトルコ系遊牧民によって建造されたトルコ・ルーン文字古代トルコ語碑文の書式が、どのように作り上げられ、どのように展開したかを論じる。当時のモンゴル高原に割拠したトルコ系遊牧国家である突厥第二可汗国（682-745）、ならびに東ウイグル可汗国（744-840）においては、大型の古代トルコ語碑文が盛んに作成された。その際、本来横書きで右から左に書かれるはずのルーン文字文が、90度文字を傾けて縦書きされる事例が多く見られる。そのうえ、縦書きの場合、行の進み方も左から右に進む事例や、右から左に進む事例が見られ、統一が取れていない。本報告では、突厥第二可汗国期の代表的な碑文であるトニユクク碑文、キョルテギン碑文、ビルゲ可汗碑文を取り上げ、縦書き碑文の書式が試行錯誤の末に形成されていた様子を論じていく。そして、その書式が生まれた背景や、その後のトルコ語文字文化にどのような影響を与えたかも考察する。

碑に系譜を刻み、保存し、再解釈する——華北における祖先伝承の変遷と碑刻——

飯山知保（早稲田大学）

本報告は、系譜を刻んだ碑が、いかにして立石当初は異文化接触を表象し、さらに政治的・社会的な要請の変化とともに、祖先伝承の源泉となってきたのかを、モンゴル時代の華北で作成された、墓碑・先塋碑などを対象にして論じる。モンゴル帝国の統治原則であった、チンギス・カンとその後裔への奉仕の来歴の重要性と、それを在来の文化慣習で理解・受容・表現しようとした華北の人々との相互作用により、モンゴル支配下で碑上の系譜情報は顕著に緻密化した。モンゴル支配の終了により、かかる奉仕の記録はその意義を本質的に失ったが、碑そのものは祖先伝承の継承や再構成・創造に格好の焦点を提供し続ける。異なる時代の情勢に応じて、碑文は再解釈され、祖先伝承には様々な変化が付け加えられ、あるいは根源的な要素が除去された。こうした中、同時代性や改竄の困難さなどの碑刻の特性は、祖先伝承の恣意的な変更に、むしろ容易に反駁できない歴史的根拠を与えてきたのである。

碑に込められた時間——重刻碑に見る水利秩序の再生の「時」——

井黒忍（大谷大学）

本報告では、立碑の一つの形態である重刻に着目し、水利碑の分析を通して、地域社会における水利秩序がいかに再生・継承されたのかを明らかにする。これまでの研究では、碑刻とそれが立てられた場との関係に基づき、公開性とともなそれを制限しうる空間的な固定性が碑刻の特徴であるとされてきた。他方、碑刻が持つ時間的な特性に関しては、素材としての石が持つ堅牢さから、そこに刻まれた碑文の永久不変をイメージさせるという理解に止まってきた感がある。ただし、重刻碑という素材を通して「時」の捉え方を見つめると、そこには過去のある「点」としての時間を復元し、それを起点として秩序を再生しようとする明確な意図が見て取れる。重刻という行為は当時の時代状況や社会情勢の下での要請であり、とりもなおさず関係者の利益保護のためのものであった。よって立石者らにとって振り返るべき過去は一義的に決定されうるものであり、重刻を通してその権益がより力強く後世へと継承されたのである。

碑に刻まれた権威——多言語碑刻が示すモンゴル帝国の表象——

船田善之（広島大学）

モンゴル時代はしばしば「碑刻の時代」と称される。モンゴル高原や中国各地の寺観祠廟に今なお立つ美碑は、モンゴル統治層と宗教教団との協力関係を今に伝える。統治層は保護を確約する命令文書を発給し、教団側は命令文書や重修の経緯を石に刻してその権威を顕示した。かかる碑刻の盛行は、モンゴル時代の碑刻を特徴づける一要素である。他方で、碑刻の形式や構造は、「中国」的「伝統」に則っており、宗教と皇室・政権との協力関係自体も、通時的にみれば普遍的な現象である。それではモンゴル時代の碑刻の本質的な特徴とは何か。本報告は、漢語以外の言語・文字を刻む営為の意味と機能に着目してこの問いに挑む。同時に多言語碑刻について、既存の定義と理解を解体し、その射程を抜本的に拡張する新たな視角を提示し、分類の再構築を試みる。こうした検討を通じて、モンゴル時代における碑刻の慣行をめぐり、モニュメント性や社会的インパクト、さらにはその背景にある政治・社会・文化にわたる意図・機能・変容に迫る。

[報告者紹介]

◇薛 夢瀟（せつ・ぼうしょう）

武漢大学中国伝統文化研究中心研究員、歴史学院副教授。博士（歴史、武漢大学）。主な研究分野は秦漢史、文化史、西南地域史。単著に『早期中国的月令与「政治時間」』（2018）。中国語への共訳著に東晋次『後漢時代の政治と社会』（2023）。『歴史研究』『中国史研究』『中国社会科学文摘』などに論文数十本を掲載。

◇新津健一郎（にいつ・けんいちろう）

信州大学人文学部助教。専門は中国古代史。東京大学大学院人文社会系研究科にて博士（文学）の学位を取得後、日本学術振興会特別研究員 PD を経て現職。西南中国地域社会史、内陸山岳部の交通史、出土文字資料研究などに取り組んでいる。主要論文「後漢西南地域における地方行政と地域文化の展開」『史学雑誌』128(12)、2019 年。「益州劉二牧政權からみる漢末州牧の地方統治」『東洋史研究』80(1)、2021 年。

◇齊藤 茂雄（さいとう・しげお）

帝京大学文学部講師。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。主な専門は 10 世紀以前の古代トルコ系遊牧民族史。特に唐との間の国際関係や、唐支配下における遊牧移民の活動について、現地出土史料を用いて研究している。主要な業績に「突厥第二可汗国の遺民集団と安史の乱——ウイグルの「援軍」派遣をめぐる——」（『東洋史研究』81-3、2022）や「タラス河畔の戦いと碎葉——唐の出兵目的をめぐる——」（『東洋学報』105-2、2023）などがある。

◇飯山 知保（いいやま・ともやす）

早稲田大学文学学術院教授。早稲田大学博士。専門は中国華北を中心とした文化接触・社会変容・祖先伝承の諸相。著書に Tomoyasu Iiyama, *Genealogy and Status: Hereditary Office-Holding and Kinship in North China under Mongol Rule*, Cambridge (Massachusetts): Harvard University Asia Center, February, 2023; 飯山知保, 『金元時代の華北社会と科举制度—もう一つの「士人層」—』, 東京: 早稲田大学出版部, 2011 年。(中国語訳: 飯山知保[著]; 鄒笛[訳], 『另一种的士人—金元时代的华北社会与科举制度』, 杭州: 浙江大学出版社, 2021 年)。

◇井黒 忍（いぐろ・しのぶ）

大谷大学文学部教授。博士（文学・京都大学）。主な研究分野は、中国近世史および環境史。乾燥地域における歴史的な水資源の利用と管理に関する研究に取り組んでいる。単著に『黄土地帯の環境史：灌漑の技術と水利の秩序』（研文出版・2024 年）、『分水と支配：金・モンゴル時代華北の水利と農業』（早稲田大学出版部・2013 年）がある。

◇船田 善之（ふなだ・よしゆき）

広島大学大学院人間社会科学研究科准教授。博士（文学、早稲田大学）。専門はモンゴル帝国史。主要論文に、“What Connects Mongol Rulers with the Chinese World: Imperial Edicts, a Literal Translation Style, and Spoken Chinese” (*Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 77/3, 2024)、「キタイ・タングト・ジュルチェン・モンゴル：覇権の遷移とその構造」（『岩波講座世界歴史 7 東アジアの展開：8～14 世紀』岩波書店、2022）。